

## 善意のリレー

— 例会場のハプニング —

東京世田谷西 山添 直

「とんだハプニングでご迷惑をおかけしますね」と私の車の中で安藤寿照君（吉川RC）がくりかえし言っている。ハプニングというのはこうである。

十月十九日、東京世田谷西では型通りの例会が行なわれていた。東京南の林功君から来月開かれるゼネラル・フォーラムに出席勧誘の話があり、その後で「ついでだが、今さっきここに来るタクシーの中でラジオを聞いていたらRhマイナス・O型の婦人が手術をして出血が止らず危篤で緊急献血を呼びかけていた」という。すると偶然にもビジターの安藤君が自分

がそのRhマイナス・O型との申し出があり、がぜん会場が色めきたった。安藤君は十万人に一人という珍しい血液型の持主だけに、その貴さがわかり、即座に輸血に協力したいという。幹事や社奉委員長、SAAの奔走で、やっと行先がわかり日赤血液センターへ向った。その間にも時間がどんどん過ぎ、瀕死の病人が一刻も早くと輸血を求めている光景が目先にチラつき車中も気が気でない。ラジオで緊急献血を呼びかけたほどだから、ジカに病人の枕元に行つて輸血するものと素人考えで、息せき切つて駆けつけた。ところが受付の看護婦さんはいささかもあわてず、さわがず、こちらが拍子ぬけするほど、悠々と手続きをすすめる。その間にも献血者がぞくぞくあらわれる。聞けば、もう四十数人の

献血があったという。「ラジオの力はおそろしいものですな」と二人で感嘆する。安藤君は「これで私も安心しました」と、献血にかけた本人が、こんなに多くの善意の協力者がいるという事実を知つて、逆に勇気づけられている。やがて無事献血をすませた安藤君がもどってきた。「とんだハプニングのおつき合いをさせて済みませんでした」と又くり返し言う。たまたま安藤君は当クラブに入会する井坂宏君の紹介者として出

席。たまたま林君がフォーラム勧誘のため出席の途中、献血呼びかけのラジオを聞いた。林君が黙つていれば善意の波紋はそれつきり。にもかかわらず、その事実を紹介した席にRhマイナス・O型の人が出て、たまたまが重なりみんなの善意が結実した。

翌朝の新聞は三段抜きで「Rhマイナス・O型血液」一日で一万四千CC、一人の患者へ最高の献血」と報じていた。ほのぼのとした喜びが再びわき上ってきた。（不動産業）